

播磨 ミステリーハント

播磨町の歴史や偉人の「?」と「!」について、秘められたトピックスなども交えながら紹介します。

文責 播磨町郷土資料館 宮柳靖
☎079(435)5000

Mystery.3

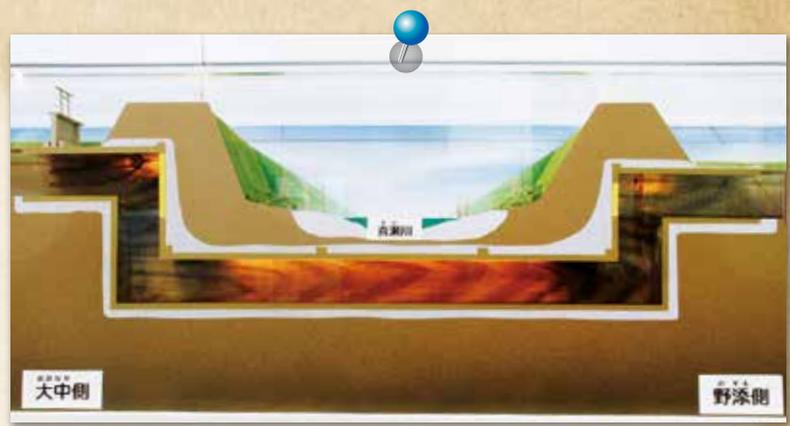
不思議な川「喜瀬川」

喜瀬川は、源流から河口まで流域によって様々な表情をみせる小さな川ですが、意外に知られていないこともあるようです。

喜瀬川は、昔から同じ名前だと思っている人が多いようです。明治のころは、本庄川や阿閑川と呼ばれていました。また文献によっては、江戸時代の終わりごろ、土山川や野添川という呼び名もみられます。喜瀬川と名付けられたのは、明治33(1900)年ごろですが、どうしてこの名前にしたのかはわかっていません。

また、喜瀬川の源流をたずねると「天満大池」という答えが返ってきます。5万分の1の地形図でもそう見えるので誤解が生じたようです。実際には、天満大池の横を沿うように流れていて、その先にある「長法池」がその源で、阿閑漁港へ注ぐ、全長約8kmの川です。淡水と海水の境は古宮橋付近で、水深は約1.5m(満潮時)です。これより上流は、コイとカメが多く生息しています。

さらに、喜瀬川には、今里傳兵衛が願い出て造られた新井(用水路)が川の下を流れています。これをどうやって造ったのか、また水が流れる内側の大きさはどのくらいなのかとたずねられます。寛文13(1673)年の「新疎水道記」によると、川底に箱を埋めて水を通



▲LED照明がついて見やすくなった埋樋の模型 (郷土資料館 常設展示)

したと記され、埋樋と呼ばれています。箱を埋めるすぐ上流を半分ずつせき止めて造ったようです。長さは21間(38.2m)で、水が流れる内側の大きさは幅2尺6寸、高さ1尺7寸(79cm×52cm)です。箱板は松で、厚さ3寸(9cm)もありましたが、夏期(6~8月)以外には水を通さないで10年も立つと傷みがひどくなり、14~15年でやりかえていたようです。修理が大変なので石造りにしようと思いますが、お金の工面がつかず、60年近く松の板を張りかえて修理し、天保(元年1830年)の初めに丈夫な石造りにしています。

現在の埋樋は、昭和32、33年に妹池から古宮大池までをコンクリートにしたときに造りかえられたもので、内側の幅は1.15m、高さは60cmで広がっています。喜瀬川は、平成8年から始まった「ふるさとの川整備事業(平成20年終了)」により新幹線高架下から上流が親水公園として整備されていますので、文化財散策を楽しみながら大中遺跡と郷土資料館へお越しください。

播磨町のホームページ <http://www.town.harima.lg.jp>
Eメール kikaku@town.harima.lg.jp



町の人口 5月1日現在 (住民基本台帳人口+外国籍人口)

34,771人(+8人)	男…17,049人(+6人)	世帯数…14,240世帯(+37世帯)
	女…17,722人(+2人)	